

<知的障がい教育部の3年間の実践>

I はじめに

知的障がい教育部では、教科の学習の年間指導計画を作成する際には前年度までの個別の指導計画を基に、児童生徒の実態等を踏まえて作成をしていた。しかし、個別の指導計画に記載されてきたことは学習してきた内容の全てではないことから、何を学んできたかがわかりにくかったり、具体的に学習内容を選択したり参考にしたりするものがないことから、これから何を学んでいく必要があるのかがわかりにくかったりした。そのため、学習の系統性が不足し、未履修の学習内容を把握できていなかったり、既に学んだ学習内容に長い期間取り組んでしまうという実態があった。また、指導方法についても指導者の裁量になっており、悩みながら指導する様子が見られた。そこで、本研究では、小学部、中学部、高等部共通の取り組みとして、算数・数学科を取り上げ、児童生徒の学びの積み上げを明確にし、学習内容が系統的につながるように計画、実践、評価、改善を進めた。具体的な取り組みとして、学習内容表と実施記録の作成と活用に取り組み、学習内容の選択や評価、改善を行った。以下、その取り組みについて記述する。

II 学部共通の取り組み

1 学習内容表の作成と活用

児童生徒の学びの履歴を積み上げていくことができるように、文部科学省著作教科書（通称 星本）を参考に、本校独自の学習内容表【表1】を作成した。目標が同じ項目はまとめて記載しており、項目数は、小学部1段階が27、2段階が52、3段階が70、中学部1段階が37、2段階が34となっている。年度初めに児童生徒ごとの学習内容表を基に年間指導計画を作成し、その後、学期ごとに更新を行った。実施済みには◎、継続して取り組む内容には○、未実施の項目には▲の印をつけ、取り組みの状況がわかるようにした。

【表1】学習内容表（例）

小学部1段階 ☆1	
（ ）内…対応する☆本の項目	
◎実施済み○継続して取り組む内容▲未実施	
A.数量の基礎	
ある・ない	◎
どこに かくれたかな	◎
どこから できるかな	◎
○○くん、いるかな	◎
あわせよう2分割（あわせましょう①②）	◎
あわせよう3分割（あわせましょう①②）	◎
あわせよう4分割（あわせましょう①②）	○
なかまを、あつめましょう	○
おなじマークをあわせよう「1対1対応」（同じマークはどれでしょう）（自分のマークはどこでしょう）（みんなにくばりましょう）	▲
B.数と計算	
ぼーるを だんだん へらしましょう（ある・ない③）	◎
3ことろう（とりましょう）	◎

これまでの学習履歴を追うことができない項目もあったが、概ね何段階に取り組んでいる児童生徒なのか、次にどの内容を扱っていけばよいのかがわかりやすくなった。

今後の活用については、現在の形式では、いつ学習した内容かがわかりにくいため、どの学年で取り組んだかがわかるような様式に改善していくことで、年度をまたいだつながりや学習のまとまりの意識につながると考える。

2 実施記録の作成と活用

実施記録【表2】は、学習の内容と評価を記録し、指導計画の改善に活かすために活用した。目標を達成した内容には○、継続して取り組む内容には△を記入し、達成状況や様子を文章でも記入した。実施記録についても学期ごとに記入した。

【表2】実施記録（例）

教科等	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
算数	数と計算3 10より大きい数 図形3 測定2～3	20までの数の大小 いろいろなかたち（しかく①） どっちがおもい、かるい どっちがたかい、ひくい	20までの数の大小 いろいろなかたち（しかく①） あつい、うすい ひろい、せまい	大きな数の書き方 いろいろなかたち（しかく②） ながい、みじかい①	順番に並べましょう ながい、みじかい②	まとめて数えましょう								
	データの活用2 ＜実施＞ 2 数と計算 ・くらべてみよう③（10まで）：○ ・なんばんめ①（5まで）：○ ・いくつといくつ①② 4までは○ 5までは△+（ブロックを使うと分かる） 2 図形 ・まるさんかくしかく②③④：○ 2 測定 ・どっちがながい、どっちがみじかい：○ ・どっちがおもい、どっちがかるい：○ ・どっちがたかい、どっちがひくい：○						＜計画＞ 2 数と計算 ・いくつといくつ②③④（ブロックなしで7の範囲まで） 2 図形 ・はたづくり ・いろいろなかたちをわけよう（大きさや色の異なるもの） 2 測定 ・どっちがあつい、どっちがうすい ・どっちがひろい、どっちがせまい	あたったら、はずれたら	かつのはどっち					
実施と計画	【日常生活の指導】 ・着替えて服の前後や長い・短いがわかる。 ・ランドセルや着替えかごを棚に合わせて入れる。 ◇朝の会 ・今日が何日かを選んで、読む。 ・スケジュールカードがないことに気付く。 ◇給食 ・ストロー配り。指定された本数をケースから取る。 一人に一本配る。 【生活単元学習】 ◇歩く ・今日は何周歩いたかを答えることができた。 ・横断歩道で、「右はどっち？」「左はどっち？」という問い掛けに正しく答えることができた。													

学習状況を踏まえて年度初めに立案した指導計画の改善を行ったことで、具体的に取り組んだ内容やできるようになったことがわかるようになった。また、次に取り組む内容を検討する際にも参考にすることができ、系統的な指導計画の作成に役立った。

各教科等を合わせた指導においても、各教科の目標を明確にして指導していくことを大切に、日常生活の指導や生活単元学習、作業学習で扱った算数・数学科の内容についても記載した。例を挙げると、日常生活の指導で同じ食器を重ねたり分別したりする活動で、図形「おなじかたちをあつめよう」の内容を扱うなどの実践があった。各教科と他の学習場面とのつながりの記載が多くあり、子どもたちの学習が教育活動全体の中でつながっていることがわかるとともに、指導者もそのつながりを意識しながら指導をすることができた。課題として、指導者によって書き方や書く内容に違いが出てしまったことが挙げられる。実施記録は引継ぎ資料としての役割が大きいと考えるため、どのような記述をすると次の担当者が学習状況の把握をする際に分かりやすいかを考えていく必要がある。どのような教材を使ったか、どこでつまづいているかについて簡潔に記入できるように改善したいと考える。

Ⅲ 取り組みから

1 本校の学習状況

前述したように、これまで、既習事項や未履修の学習内容を把握できていなかったり、既に学んだ学習内容に長い期間取り組んでしまったりするという実態があった。そこで、児童生徒の学びの履歴を積み上げていくことができるように、令和4年度に研究部で学習内容表の作成に取り組み、令和5年度と令和6年度に活用した。その取り組みから、学習内容の積み上げが見られたか【表3】、また、令和6年度はどのくらいの項目数に取り組むことができたか【表4】について集約した。

【表3】学習内容表を活用し、学びの積み上げが見られた児童生徒の割合¹⁾

小学部	100%
中学部	95%
高等部	76%
全体	90%

1) 令和5年度までの学びの履歴を基に、令和6年度に新たに取り組んだ学習内容表の項目が1項目以上ある児童生徒の割合。(令和5年度の高等部3年生は除く。)

【表4】令和6年度に取り組んだ学習内容の項目数の割合

小学部	0～10項目：38%	11～20項目：46%	21項目以上：26%
中学部	0～10項目：41%	11～20項目：24%	21項目以上：35%
高等部	0～10項目：80%	11～20項目：13%	21項目以上：7%

学習状況のデータから、【表3】の学びの積み上げについては、学習内容表の未実施の内容(▲)や継続して学習が必要な内容(○)を中心に学習内容を選択して実施することができた。その際に、絵合わせ(3項目)、長さの学習(5項目)など内容のまとまりごとの系統的な実施が多く見られ、指導者が学びの縦のつながりを大切にしながら取り組んでいることがわかった。全体としては、90%の児童生徒がステップアップした学習内容に取り組むことができた。また、取り組むにあたって留意したことは、実施済みの項目を増やしていくことのみを重要視するのではなく、同じ項目の目標であっても教材を変えるなどしてその内容が身に付いているかを確認することを大切にした。各学部で、教材を見合ったり、学習内容について意見交換をしたりして授業づくりに活かすことができた。

【表4】の、取り組んだ学習内容の項目数については、11項目以上が小学部は約7割、中学部は約6割、高等部は2割となっていた。今年度の児童生徒の実態では、学部が上がるにつれて取り組みの項目数はやや少なくなっていく傾向にあった。この点については、【表3】とも関連するが、小学部段階で児童の実態の理解や興味関心を広げるために多くの内容に取り組み、徐々に児童生徒の興味関心がはっきりしてきたり、卒業後の生活を見据えて学習内容を精選し、深めていったりしていると考えられる。ただし、学習指導要領には、各教科において、「内容は、特に示す場合を除きいずれの学校においても取り扱わなければならない」と示されているため、その点にも留意しながら、児童生徒の実態を踏まえ学習内容を考えていく必要がある。

2 職員アンケートより

学習内容表と実施記録の活用が、教育内容の選択や年間指導計画の作成と改善に役立ったかについて、【表6】のように職員の感想や意見を集約した。

【表6】学習内容表と実施記録の活用についてのアンケート結果

①学習内容表があることで、学習内容の確認や指導計画の作成・改善に役に立ったか。 役に立った：83.3% あまり役に立たなかった 16.7% 【意見】 ・どのような課題に取り組んでいくべきかがわかり、計画が立てやすかった。 ・同じ学習内容でも、様々な角度からのアプローチが大切で、それが定着につながると思う。 ・星本の1段階は抽象的な内容が多く、取り組み方が難しいと感じた。 ・重複学級では、学習内容表の代わりになるものも必要だと思った。 ・未履修の部分とその理由を引き継いでいくことも大切なので、記載する欄があるとよいと思った。
②学習内容表について、前学年（前学部）からの引継ぎ資料として活用できたか。 活用できた：73.7% あまり活用できなかった 26.3% 【意見】 ・担任になり、実態把握に活用できた。前年度の状況が分かり、計画立案に役立った。 ・前年度取り組んでいない分野を優先的に計画することができた。 ・定着しているかどうかの評価については難しい。
③実施記録があることで、指導計画の作成や改善に役に立ったか。 役に立った：74.5% あまり役に立たなかった 26.5%
④実施記録に、「学校生活とのつながり（日生、生単、作業等）」について記入したことで、学習場面間のつながりを意識することができたか。 意識することができた：85.2% あまり意識できなかった：14.9% 【意見】 ・算数数学と他の学習場面を双方向に活かし、深めるという考え方も意識したい。 ・特に小学部低学年は、生活すべてが教科の学習とつながっていることを実感できた。意図的な言葉掛けや環境を整えることで、日常に般化され、力になると思った。
⑤実施記録について、前学年（前学部）からの引継ぎ資料として活用できたか。 活用できた：52.6% あまり活用できなかった 47.4%

アンケート結果から、①～④の項目で「役に立った」が7割を超えており、学習内容の選択や年間計画の改善に役に立ったという成果が見られた。1段階の内容に取り組む児童が多い小学部では、指導者が授業で活用している教材を集約して教材集を作成し、共有したり学習内容について考えたりすることができた。中学部や高等部でも、授業や教材を見合い、話し合いを通して学習内容や授業づくりについて考えることができた。⑤については、「活用できた」が約半数であった。さらに引継ぎ資料として効果的に活用していくには、前述したように、やはり必要な情報の精選が必要であると考えられるため、記入する事項について改善が必要である。

IV 3年間の取り組みより

1 縦のつながりと横のつながり

3年間の取り組みを通して、縦のつながりについては、学習内容表と実施記録という統一した様式で児童生徒の学習状況を把握し、系統的なつながりを踏まえて学習に取り組むことができた。また、学期ごとに学習内容表と実施記録を更新し、計画の改善を図ることができたことで、より児童生徒の実態に合わせた指導計画の作成ができた。

横のつながりについては、各教科等を合わせた指導において、各教科の目標や内容を踏まえて指導していくことについて職員で共有し、日常生活の指導や生活単元学習、作業学習において各教科とのつながりを意識しながら指導をすることができた。そして、その縦のつながりと横のつながりを引き継いでいくという流れに取り組むことができたことは大きな成果であった。今後に向けて、未実施の学習内容や既に学んだ学習内容について、取り組んだ内容や繰り返しの学習が必要な内容を記録し、未実施の内容をいつ学習するのかや、まだ取り組んでいない理由についても引き継いでいけるとさらに児童生徒の実態を踏まえた系統性のある計画になると考える。

2 学びの深まり

教科別の指導で学んだことと他の学習場面とが相互につながり、学習内容の深化や学びに向かう意欲の高まりが見られた。例を挙げると、数学科の「データの活用」で学んだグラフを活用し、作業学習で出来高表を作って個数を確認することで、生徒が達成感を持ち、バザーへの意欲をもって取り組む生徒が増えた。また、日常生活とのつながりにおいては、図形を学習することで身近な物の形への興味関心が増え、「窓の形は四角だな。」など日常の中で学習したことと結びつく会話が増えてきた。日常生活の場面とつながる学習内容や教材を意図的に取り上げ、教科別の指導の中でも实际的な教材を活用するなどして繰り返し学習したり、日常の場面でも児童生徒の気付きにつながるような働き掛けをしたりすることで、学びが深まり、日常生活に生きていくと考える。

3 生活とのつながり

「つながりのある学び」について各学部で話し合う過程で、日常生活や卒業後の生活など、「生活につながる学び」を大切にしたいとの声が職員から多くあがった。生活に活きる学びはどの学習においても重要であるという考えを共通理解し、学部ごとに、生活につながる学習内容や指導方法についても研究を進めた。詳細については後述する各学部の取り組みに記載する。

4 職員の意識の向上

職員アンケートの結果から、学習内容表と実施記録の活用に取り組んだことで、「児童生徒の実態把握や取り組むべき課題がわかりやすくなった。」「指導計画の作成に役に立った。」「学習内容のつながりがわかりやすくなった。」という意見があった。そこから、つながりを大切にしたい計画の作成や改善の意識が高まったと言える。今後も、改善を加えながら継続して活用していくことで、学びがつながる指導ができると考える。

本研究の成果と課題を踏まえ、今後も各教科の目標と内容を明確にするとともに、学習したことが縦と横、そして生活につながることを大切にして指導にあたっていきたい。